

原 著

教育実習における気付きの特長から見える教育的取り組みの在り方

浜田 幸作^{1*}, 小島 一久¹, 田村 由香²

要約：幼児保育学科1年生では、1月に1週間の幼稚園教育実習が行われ、2年生で6月に4週間の幼稚園での教育実習が行われている。本論文は6月の教育実習後、科目「教育実習の研究」の時間に、事後指導として学生が実習で学んだことの発表内容を、分析し考察を加えたものである。研究対象は、高知学園短期大学幼児保育学科2年生の発表原稿である。

学生が学んだこととして、取りあげていた「場面」、「子どもの状態や様子」、「保育者の働きかけ」、「子どもの変化」、「学生が学べたこと」の5つの側面を抽出分類した。「場面」では3個、「子どもの状態や様子」では10個、「保育者の働きかけ」では6個、「子どもの変化」では8個、「学生が学べたこと」では7個のカテゴリーに分類でき分析を加えた。そこから本学の実習における成果や課題を取りあげ、今後の指導や学習内容についての方策を提示した。

キーワード：遊び、子ども理解、保育者の支援、環境構成、保育者の役割

I はじめに

高知学園短期大学幼児保育学科は、1年生において9月に2週間の保育実習Ⅰ-1、翌年2月に科目「教育実習の研究」の中で1週間の教育実習を行っている。2年生になると6月に4週間の教育実習、8月から9月にかけて10日間の保育実習Ⅰ-2、11月に2週間の保育実習が行われている。

幼稚園の教育実習は、1年生後期から2年生前期に亘って行われる科目「教育実習の研究」の授業で、教育実習に向けた準備が行われており、学生は幼稚園教諭としての職責を理解するため、指導計画立案を身に付けて実習に参加している。実習では、子どもの様子をしっかり観察し、記録や振り返りによる課題発見と改善計画を具体的に定めるよう事前学習をしているところである。教育

実習終了後は、成果発表と振り返りによる課題のまとめと改善計画によるレポート提出を義務付けている。

教育実習の目的は、幼稚園教諭の役割についての認識を深め、確かな学級経営力や保育指導力、幼稚園教諭としての資質を身につけることであり、学生たちは指導計画の立案と実践、保育技術の習得等を実習の目標としている。そうした目標を掲げ、学生は、子ども理解や支援の在り方、環境構成等について、課題意識をもって実習に臨んでいるが、幼稚園教育実習は、1年生の時とは比較にならないほど、責任が重くのしかかってくるため、日々が緊張と学びの連続で、息の抜けない現場実習となっている。実習が始まるや指導案や日案、週案等の指導計画に追われることになり、

¹ 高知学園短期大学 幼児保育学科 *Email: khamada@kochi-gc.ac.jp

² たちばな幼稚園

多忙な日々直面する。さらに、現場では指導案どおりに進むとは限らず、指導の在り方に戸惑いや不安を感じている状況もある。そのような状況の中で実習が行われているが、保育者からの助言や手本が示されることによって、その適切な子どもへの援助の仕方から、気付きや深い学びを得ている。

本研究対象原稿は、実習において学生が気付きや学びについて、3つの視点（①子どもに関すること、②保育者に関すること ③環境構成に関すること）のうち、印象に残ったいずれかの項目を取りあげて発表したものである。この発表原稿の内容から、実習による学生の気付きや学びを5つの側面から取りあげ、分析することで、幼稚園教育実習に関する本学の指導の在り方も踏まえて検討した。

なお、本研究より教育実習における指導の在り方として必要なカテゴリーが具体化されれば、そのカテゴリーに基づいて学生が実習に向けた目標と課題を検討する習慣形成に有益である。その結果、目標と課題を具体的に定めることが可能となり、現実的な内容を自覚することで動機づけの向上も期待される。

II 研究目的

学生の気付きの内容や学びにつながる「場面」、「子どもの状態や様子」、「保育者の働きかけ」、「子どもの変化」、「学生が学べたこと」の5つの側面を取りあげ、その内容を明らかにして、学生が肌で感じ、習得した全容を解明する。それによって、教育実習における全体の傾向を把握する。

また、学生の子ども理解の内容や深さ、保育者の支援の在り方、環境構成の大事さを、学生がどこまで自分のものとしてとらえられているのか等を明らかにする。さらに、課題についても考察し、本学が求める幼児教育の実習のねらいや在り方は、適切なものであるのかを検証し、本学の教育内容の見直しに役立てることを目的とする。

III 研究方法

1 研究方法

本学の幼児保育学科の実習は、1年生で保育実習Ⅰ-1（9月に2週間）と教育実習（2月に1週間）を行い、2年生で教育実習（6月に4週間）と保育実習Ⅰ-2（8月から9月にかけて10日間）、保育実習Ⅱ（11月に2週間）を行っている。

本研究では、平成29年度に2年生の教育実習に参加した学生を対象に、7月に科目「教育実習の研究」の授業において、実習で学んだことを発表した原稿を研究の材料としている。その内容についてKJ法を用いて質的に分析し検討を加えることとした。なお、本研究は平成29年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て進められた（承認番号第26号）。

2 調査対象

高知学園短期大学幼児保育学科2年生の手書きの発表原稿62文書である。なお、幼稚園教育実習に参加した学生は79名（うち男子5名）であり、全員から研究に同意を得られたが、氏名不詳や判読不能の文書もあり、それらは研究対象から除外した。

IV 結果

科目「教育実習の研究」の時間に、教育実習の事後指導として学生が実習において学んだことの発表原稿をKJ法で分析した。その結果、5つの側面は、表1～表5に示すようにそれぞれいくつかのカテゴリーに分類された。なお、表1～表5の内容に掲載している○数字は、年齢を表したものである。

1 場面（表1）

場面の側面として、3つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーのサブカテゴリーとその内容について述べる。

1) 『園の一日の流れ』

本カテゴリーには、5つのサブカテゴリーがあった。

（１）〈身支度〉

内容には「朝の身支度や食事の場面」「朝の荷物の準備」その他の場面が挙げられた。園児たちは、保護者に付き添われて登園し、シール帳にシールを貼り、着替えをする。コップやタオルを出したり、身の回りの物を片付けるという朝の慌ただしい中での状況に目を向けている。

（２）〈遊び〉

内容には「どろんこ遊び」「砂場遊び」等多様であった。幼稚園の１日の流れの中では、一般的に午前中に中心となる活動があり、午後に自由遊びが設定されている。中心活動では、描画や制作活動、音楽や運動等をクラス単位で行うことが多い。自由遊びでは子どもたちがそれぞれ興味ある好きな遊びを見つけて行っている。そうした様々な場面が取りあげられている。

（３）〈給食・食事〉

内容には「昼食を食べるのが遅くなりプール遊びを楽しむ時間がなくなり怒る子ども」その他が挙げられた。園では、お弁当もしくは給食を食べることになるが、食事の遅い子や好き嫌いがある子ども、食事中遊ぶ子どもの様子が窺える。

（４）〈排泄〉

内容には「排泄時間」「活動前後の排泄時間」に排泄せずでてくる子ども」のことが挙げられた。排泄は、食事や睡眠、運動等といった人間の心身の発達や成長にかかわる生活習慣の基礎となるものであり、日常生活の積み重ねによって培われる。幼少期の大事な対応の一つとして取りあげている。

（５）〈学習・行事の練習〉

内容には「算数プリント問題に取り組む場面」「誕生会でする劇の練習」その他の場面が挙げられた。幼児期における教育は、人格形成の基礎を培うものである¹⁾ことから、指導計画を立てて、学習や行事を通して生きる力の基礎を育む活動の場が設定されている。

２）『園の環境整備』

本カテゴリーには、１つのサブカテゴリーが

表１ 場面

カテゴリー	サブカテゴリー	内容（＊ ○数字は年齢）
園の一日の流れ	身支度	朝の身支度や食事の場面
		朝の荷物の準備⑤
		登園時のシール貼り、着替え、コップとタオル出しの援助の場面③
		着替えや片付け⑤
		遊び
		どろんこ遊び⑤
		砂場遊び⑤
		芋のつる植え④
		園庭での自由遊び④
		ブランコ③
		プール遊び③
		うんていが中々出来ない子⑤
		初めてブラックベリーを採って食べる場面③
		じゃんけん取りゲームの場面⑤
		ヒーローごっこ③
		自由遊び③
		折り紙や絵を描く⑤
		英語で遊ぼうの活動③
		積み木④
		絵本を見ている時④
		ブロック遊び⑤
		ままごと、積み木、こままわし⑤
		お店を作って遊ぶ④
		折り紙で七夕の作品を作る⑤
		絵本の読み聞かせの場面
		段ボールを使った遊び④
		友だちと遊ばうとしない⑤
		全体ゲームでみんなバラバラになった④
		ケンカの場面
	給食・食事	昼食を食べるのが遅くなりプール遊びを楽しむ時間がなくなり怒る子ども④
		給食の時間、２人の男児が席を立ち椅子で遊んでいる④
		好き嫌いが多く昼食のおかずを食べない子ども③
		昼食時スプーンで遊んでいる子ども③
	排泄	排泄の時間
		活動前後の排泄時間排泄せずでてくる子③
	学習・行事の練習	算数プリント問題に取り組む場面⑤
		誕生会でする劇の練習④
		運動会⑤
園の環境整備	環境構成	朝の環境構成
		ロッカーの整理ができていか声掛けする場面④
	保育者の支援	ままごとコーナーの物販環境構成の工夫の場面③
		３歳児に言葉で説明して自分で出来るようにする場面③
		自分の思いを言葉に出せるようにと関わる場面③
		周りと関わるのが苦手な子と関わる場面⑤
		特別支援が必要な子と関わる場面③
		登園時にお母さんと離れることができず泣く子と関わる場面④
		体調不良の子と関わる場面③

あった。

（１）〈環境構成〉

内容には「朝の環境構成」「ロッカーの整理ができていか声掛けする場面」その他の場面が挙げられた。環境は、子どもの成長に大きく関わることになるため、そうした環境構成の様子を取りあげている。

3)『保育者の支援』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈個別支援の必要な子〉

内容には「3歳児に言葉で説明して自分で出来るようにする場面」「登園時にお母さんと離れることができず泣く子と関わる場面」その他の場面が挙げられている。このように園では、特別支援以外の個別支援によって成長を促す場面も多く存在している。

2 子どもの状態や様子(表2)

子どもの状態や様子の側面については、10のカテゴリーがあった。

1)『自由に遊ぶ』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈楽しんでいる〉

この内容には「別々の場所で穴を掘っている」「自ら進んで好きな色で色水を作っている」その他が挙げられた。園では、子どもたちは様々な自由な遊びを一心不乱に楽しんで行っている。

2)『状況を分かって行動する』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈積極的な行動をする〉

内容には「リーダーで遊びを進める子は問いかけや話に積極的に答えている」ことを挙げていた。5歳になるとリーダー性を発揮する子どもの積極性が見える。

(2)〈質問してくる〉

内容には「ブラックベリーの赤い実より黒い実がどうして美味しいのかと聞く」「植え方を担任の先生に聞く」ことが挙げられた。3、4歳児は、好奇心の旺盛な時期であり、そうした様子がわかる。

(3)〈わかっている〉

内容には「自分たちがふざけていたと答え、何がいけないかわかっていた」「5歳児は保育者の

声掛けですべきことに気づき、行動できていた」ことが挙げられた。4、5歳児の理解力や判断力の深まりの様子が分かる。

3)『行動に個人差がある』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈昼食時の様々な状態〉

内容には「食べるのがゆっくりな子。苦手な野菜のある子。おしゃべりに夢中になる子。何度もお箸を落とす子」のことが挙げられた。年齢や月齢等によって、食事における個人差がみられる。

(2)〈取り掛かりに差がある〉

内容には「個人差があり、すぐに行動へ移す子、ゆっくりと始める子もいる」ことを挙げていた。食事のみならず、取り掛かりにも差が表れている。

(3)〈消極的な行動をする〉

内容には「リーダーの後ろについていき消極的な姿が見られる」ということを挙げていた。年長になっても、積極的な子もいれば、消極的な子も存在し、それぞれの個性もはっきり表われる。

4)『仲よく遊べない』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈言葉でなくすぐ手が出る〉

内容には「自分の思いを言葉にできずすぐ手が出る」「一緒に、遊びたいという思いを言えず叫ぶ、友達が作ったものを壊す行動で表す」ことが挙げられた。言葉で伝えられないもどかしさを行動で表すことが見られる。

(2)〈イザコザが起こる〉

内容には「帰国子女で日本語の会話が不十分でいざこざが起こる」「持っていたおもちゃを別の子が引っ張って持っていこうとする」その他が挙げられた。様々なトラブルが日常的に発生している。

(3)〈遊具を占有する〉

内容には「ブランコに集中して降りようとしないう2人の女の子」のことを挙げていた。楽しくなると夢中になって自分の世界に入り込む様子が見

られる。

5)『みんなと遊ばない』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈みんなと遊ばない〉

内容には「保育者と一緒に遊ぶか決まった友達としか遊ばない」「一人で折り紙をしたり絵本を読んだりしていることが多い」ことが挙げられた。集団行動が苦手な子どもや発達障害の場合等、子どもの様子から窺えることは多い。

6)『周りに合わせられない』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈静かに集中しない〉

内容には「読み聞かせで数人の子がザワザワして静かに聞かない」ことを挙げていた。ザワザワするのは、本を読む環境や興味関心が関係していることもある。

(2)〈最後まで参加しない〉

内容には「最後まで参加しなかった」ことを挙げていた。自分の嫌なものには参加しないこともある。

(3)〈お当番をしない〉

内容には「お当番をしない子、自分のしたいことが一番の子」のことを挙げていた。自己主張やわがままが見られる。

7)『自己表現がうまく出来ない』

本カテゴリーには、5つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈自分の気持ちを伝えられない〉

内容には「一緒に遊びたいという自分の気持ちを伝えられない」ことを挙げていた。子どもは自分を知ってもらいたい、わかって欲しいという気持ちにあふれているが、子どもの自己表現の方法はそれぞれ異なり、上手に表現できる子もいればそうでない子もいる。

(2)〈話をしない〉

内容には「園内で自分から声に出して話をしない、うなずく子」その他が挙げられていた。子どもは自分の気持ちや考え・意思をいろいろな方法で表現する。その表現方法は年齢や発達に応じて変化していく。

(3)〈友達に戸惑う〉

内容には「最初は友達と接することに戸惑っていた」ことが挙げられた。成長の過程で見られる現象でもある。

(4)〈目を合わせない〉

内容には「朝の挨拶でも目を合わせてくれない」ことが挙げられた。まわりの人に興味や関心がないとか、友達に興味はあるが、コミュニケーションがとれない、人と目を合わせようとしない等、発達障害のサインの場合もある。

(5)〈大きな声が出せない〉

内容には「恥ずかしくて大きな声が出せない」ことが挙げられた。大きな声で元気いっぱい話す子どもは、性格も明るく積極的な印象を与える。小さな声も練習によって言葉がハッキリ出せるようになる。

8)『苦手なことがある・構って欲しい』

本カテゴリーには、5つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈泥が苦手〉

内容には「泥が苦手な子」を挙げていた。子育ての中で、親から汚れるのを注意され、それが汚れを嫌うことにつながり、泥遊びを嫌がる子どももいる。

(2)〈構ってもらいたい〉

内容には「教師たちにかまってもらいたいのか‘しんどい’と言ってくる」ことが挙げられた。子どもは好きな人にたくさん見てもらいたいし、構ってもらいたいという気持ちを持っている。

(3)〈やって欲しいと言ってくる〉

内容には「‘これやって’と言ってくる」等が挙げられた。信頼する親に近い存在であると感じる保育者と心から遊びたいと願って、保育者に頼

ることがある。

(4) 〈出来ないと言う〉

内容には「食事の場面で嫌いなものが食べられないと言う」「算数プリント問題が‘わからん’と言い聞きに来る」その他が挙げられた。嫌いなものを食べないとか、自信のないことは失敗が怖くてやらない等、しない、出来ないという子どももいる。

(5) 〈泣く〉

内容には「自分の思い通りにいかないとすぐ泣いて保育者のところに行く」「プールをもっとしたいと泣き出す」その他が挙げられた。子どもは泣くことによって生きるための力を育んでいる。

9) 『出来ないことがある』

本カテゴリーには、一つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈トイレに行けない〉

内容には「本当はトイレに行きたいが不安でいけないでいた」その他が挙げられた。どんな子どもでも、ときには何らかの不安を抱く。3～4歳児はよく暗闇や怪物を恐れることがあり、トイレもその一つ。

10) 『悩む姿がある』

本カテゴリーには、2つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈出来ないで落ち込む〉

内容には「うんていに何度挑戦しても手を放してしまい落ち込んでいる」ことを挙げていた。子どもは途中でくじけて諦めてしまいやすく、些細なことでも自信をなくし、ガックリきてしまうことがある。「こんな経験は二度としたくない」と思うと、主体的に動けなくなってしまうことになる。

(2) 〈葛藤している身支度〉

内容には「寂しいからお母さんと離れたくない、でも離れなければならないと葛藤している」ことを挙げていた。登園時に離れたくなくて泣いてしまう子どもはたくさんいる。分離不安が強い子で

も保護者の姿が見えなくなると、保育者に甘えながらすぐに泣き止むことが多い。こうした分離不安は成長の過程では大切なことである。

表2 子どもの状態や様子

カテゴリー	サブカテゴリー	内容 (* ○数字は年齢)
自由に遊ぶ	楽しんでいる	別々の場所で穴を掘っている⑤
		自ら進んで好きな色で色水を作っている
		役割分担をし、山を作りトンネルを掘り崩れたら何度も直し、トンネルの穴がつながり、子どもたちが大喜びする⑤
		ブロックで鉄砲を作って見せている③
		朝の荷物の準備より友達と遊んだり虫の図鑑を見たり水槽や虫かこの虫で遊ぶ⑤
		おしゃべりに夢中になり食べる手が止まる⑤
状況を分かって行動する	積極的な行動をする	絵本を読んだり、折り紙で紙飛行機や手裏剣をしたり遊んでいた⑤
		リーダーで遊びを進める子は問いかけや話に積極的に答えている⑤
	質問してくる	ブラックベリーの赤い実より黒い実がどうして美味しいのかと聞く③
		植え方を担任の先生に聞く④
行動に個人差がある	わかっている	自分たちがふざけていたと答え、何がいけないかわかっていた④
		5歳児は保育者の声掛けですべきことに気付き、行動できていた⑤
		5歳児は保育者の声掛けですべきことに気付き、行動できていた⑤
仲良く遊べない	イザコザが起る	昼食時の様々な状態
		食べるのがゆっくりな子。苦手な野菜のある子。おしゃべりに夢中になる子。何度もお箸を落とす子③
		取り掛かりに差がある
みんなと遊ばない	みんなと遊ばない	個人差があり、すぐに行動へ移す子、ゆっくりと始める子もいる③
		消極的な行動をする
		リーダーの後ろについていき消極的な姿が見られる⑤
		言葉でなくすぐ手が出る
		自分の思いを言葉にできずすぐ手が出る③
		一緒に、遊びたいという思いを言えず叫ぶ、友達が作ったものを壊す行動で表す③
		勝手に男の子に片付けられ女の子は泣く。「やめて」と言うもやめてもらえない④
		帰国子女で日本語の会話が不十分でいざこざが起る⑤
		めあてを勝ち負けにしたのでいざこざが多発
		二人で遊んでいる所に「仲間に入れて」と来るが断られ邪魔をする④
周りに合わせられない	最後まで参加しない	ゲームでトラブルが多く出る⑤
		砂場でスコップの取り合いで泣き続け、最後はママーと言い泣く③⑤
		「お片付けで」と教えたなら怒られた④
		持っていたおもちゃを別の子が引っ張って持っていくとする③
自己表現がうまく出来ない	友達に戸惑う	練習での勝ち負けでチーム別にぎくしゃく⑤
		遊具を占有する
		ブランコに集中して降りようとしなない2人の女の子③⑤
		保育者と一緒に遊ぶか決まった友達としか遊ばない⑤
周りに合わせられない	お当番をしない	一人で折り紙をしたり絵本を読んだりしていることが多い④
		静かに集中しない
		読み聞かせで数人の子がザワザワして静かに聞かない⑤
		最後まで参加しない
自己表現がうまく出来ない	目を見合わせない	最後まで参加しなかった③
		お当番をしない子、自分のしたいことが一番の子⑤
		自分の気持ちを伝えられない
		一緒に遊びたいという自分の気持ちを伝えられない⑤
周りに合わせられない	大きな声が出せない	園内で自分から声に出して話をしない、うなずく子③
		話をしていない
		いつも一緒にいるが、毎日声をかけて、やっと2週目の終わりに小さな声で「おはよう」⑤
		友達に戸惑う
周りに合わせられない	大きな声が出せない	最初は友達と接することに戸惑っていた④
		目を合わせない
		朝の挨拶でも目を合わせてくれない⑤
		大きな声が出せない
		恥ずかしくて大きな声が出せない④

苦手なことが構って欲しい	泥が苦手	泥が苦手な子⑤
	構ってもらいたい	教師たちに構ってもらいたいのか「しんどい」と言ってくる⑤
	やって欲しいと言ってくる	「これやって」と言ってくる③
		「先生作って～」と来て一緒に作るが、出来上がると、新しいものを作るようにと次々に要求してくる③
		折り紙の本を見て折ることが出来るのに、皆に同調して保育者に頼る⑤
	出来ないと言う	食事の場面で嫌いなものが食べられないと言う
		給食のおかずを食べられず最後の方に残っている。「もういらん」という③
		算数プリント問題が「わからん」と言い聞きに来る⑤
	泣く	自分の思い通りにいかないとすぐ泣いて保育者のところに行く⑤
		友人とぶつかりこけて泣いていた③
		プールをもっとしたいと泣き出す④
出来ないことがある	トイレに行けない	本当はトイレに行きたいが不安でいけない③
		トイレトレーニング中の子、パンツの子、おむつの子同じ三歳児でも個人差が大きい
悩む姿がある	出来ないで落ち込む	うんていに何度挑戦しても手を放してしまい落ち込んでいる⑤
	葛藤している	寂しいからお母さんと離れたくない、でも離れなければならないと葛藤している④

3 保育者の働きかけ（表3）

保育者の働きかけの側面については、6つのカテゴリーに分類された。

1) 『子どもの気持ちに寄り添う』

本カテゴリーには、6つのサブカテゴリーがあった。

（1）〈気持ちや理解を確認する〉

内容には「‘何で席を移動しなければいけないのかわかる?’と聞き理解しているか確かめていく」「トラブルになった子どもと話す前にまずは何があったかを聞く」ということが挙げられた。保育者は子どもの気持ちを理解することから始まる。まずは「傾聴」し、子どもの“目線”に立って、子どものつたない言葉から「本心を想像」することが大事になる。

（2）〈気持ちの代弁をする〉

内容には「今の気持ちに共感した上で、友達の気持ちを分かりやすく代弁」「子ども同士のトラブルを見守りながら、子どもの気持ちを代弁して相手に伝える」ということが挙げられた。子どもは相手に上手く伝える言葉を持っていない。相手の気持ちを受け止める力も未熟で、自己中心的存在といえる。他の人にも感情があることを知るのは3歳を過ぎる頃と言われている。持っていた玩具を友だちに取られて、手が出て友だちを泣かせ

てしまった場面を想定すると、玩具を取られて嫌な気持ちだったことを理解したうえで、相手の気持ちを代弁することが大事となる。そのように最初に子どもの気持ちに寄り添い認めた上で、相手の気持ちがどうなっているのかを伝えている。

（3）〈子どもの気持ちを聞く〉

内容には「自分の気持ちは自分の言葉で表現しないと分からない、伝わらないので‘なあに?’と耳を傾けている」その他が挙げられた。傾聴したり、「それで、あなたはどう思ったの?’等と気持ちを尋ね、少しずつ子どもの心の内面に近づき、解決に向けて支援が行われている。

（4）〈気持ちを受け止める〉

内容には「‘少ししかプールに入れなかったね、明日はお弁当早く食べていっぱい遊ぼうね’と気持ちを受け止めていた」その他が挙げられた。子どもは自分でなかなか気持ちを切り替えることはできないため、思いを受け止め、落ち着いたところで、言葉がけをしている。

（5）〈ほめる〉

内容には「‘すごいね、がんばったね’等と褒める、頑張ったことを認める」その他が挙げられた。子どもは、褒められることで、自分は認められたという気持ちになり、やる気が生まれる。大きなことや特別な時だけでなく、些細なことでも褒めている。

（6）〈ハグする〉

内容には「嬉しい気持ちを共感する時はギュッと抱きしめている」ということを挙げている。ハグ等のスキンシップが沢山取れている子どもは、「愛されている」というゆるぎない自信と安心感を持ち、落ち着きが見られ、情緒が安定すると言われる。それが自立に結びつくことから、そのような保育者の実践が見られる。

2) 『見守り』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

（1）〈見守る〉

内容には「子ども同士のトラブルが起こった際

には必要以上に間に入らず、手が出るなどの危険がない限り見守る」その他が挙げられた。子どもが失敗しないように、つい手や口を出してしまうことは、子ども自身で考えて乗り越えられる可能性を奪うことになりかねない。子どもが自らの力を発揮できる環境を用意して、子どもを信じて見守る保育が行われている。

3) 『適時に声掛けをする』

本カテゴリーには、9つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈子どもの興味を引く、分かりやすく言う〉

内容には「スイミングで深い所まで潜る時‘忍者になったつもりで見つからないように隠れて泳いでみよう’と子どもに分かりやすく言う」その他が挙げられた。保育者がかける言葉が子どもに与える影響は大きい。子どもたちの興味関心を引く言葉や自尊心をくすぐる嬉しい声かけをすることで、子どもの素直な行動を引き起こしている。

(2) 〈できそうな提案をして励ます〉

内容には「食べられないと言う子に‘まず1口食べてみよう。美味しいかもしれん’と励ます声かけ」「‘この穴をつないでみたら?’と声かけ」その他が挙げられた。子どもへかける言葉は、子どもが将来どんな人間になるかに影響すると言われる。何気ない声かけではなく、子どもを伸ばすための声かけには大きな意義がある。子どもの性格や性質、能力等を評価するのではなく、見たままや自分が感じたことを具体的に言う声かけをすることによって、自分で問題解決方法を模索することを助けることにもなる。そういうことを考えた声かけが行われている。

(3) 〈お手伝いをお願いする〉

内容には「自分のおもちゃを片付け終わった子にはおもちゃが落ちていないか、パトロールしてきてくれる?と聞く」ことを挙げていた。子どもは、お手伝いを通して成長する。手伝いをしかけておいて感謝と褒め言葉をかけるとさらに自信とやる気につながる。

(4) 〈子どもの人間関係を把握して声掛けする〉

内容には「子どもの人間関係を把握した上で、声掛けをしている」その他が挙げられた。集団の中で、皆の了解のもとに依頼したり、子ども同士の話し合える環境をつくる大事さが示されている。

(5) 〈一人一人の特徴を知って声掛けする〉

内容には「食事の時も全員を気にしながら見て声をかけている。一人一人の子どもの特徴を知って、対応している」その他が挙げられた。子ども達は良くも悪くも素直でまっすぐなところがある。例えば、着替え一つをとっても、やる気に満ち溢れている時やお気に入りの洋服の時にはササっと着替えを済ましてしまうが、気分が乗らない時や思っていたものと違う洋服が出てきたら時間がかかる。保育者は、そうした一人一人の特長や個性を考えて声かけを行っている。

(6) 〈明るく挨拶する〉

内容には「登園時、一人一人に明るくおはようと挨拶していた」ことを挙げていた。挨拶は、基本的生活習慣の最も基本であり、毎日しっかりと目を見て、一人一人に声をかける保育者の様子が想像できる。

(7) 〈感情をこめて伝える〉

内容には「読み聞かせの時、声に抑揚があり感情がこもっていた」ことを挙げていた。コミュニケーションにおける言語的スキルには、声の大小、強弱、高い低い、速さ、間合い、テンポ、リズム、抑揚、言葉の量、声の調子等があり、それらを考慮することで、子どもが自然に受け入れる態勢にもっていつている。

(8) 〈子どもの少しの変化でも声掛けする〉

内容には「髪を切ったり結んだりしてきた子に‘似合ってる’‘かわいい’‘かっこいい’などと変化に気付いて声掛けをする」ことが挙げられた。子どもは、髪を切ったりした自分の姿に、どのような評価をされるか不安な気持ちがある。その不安を解消させ、自信を持たせる表現が行われている。

表3 保育者の働きかけ

カテゴリ	サブカテゴリ	内容（※ ○数字は年齢）
子どもの気持ちに寄り添う	気持ちや理解を確認する	「何で席を移動しなければいけないのかわかる？」と聞き理解しているか確かめていく④ トラブルになった子どもと話す前にまずは何があったかを聞く④
	気持ちの代弁をする	今の気持ちに共感した上で、友達の気持ちを分かりやすく代弁⑤ 子ども同士のトラブルを見守りながら、子どもの気持ちを代弁して相手に伝える③
	子どもの気持ちを聞く	自分の気持ちは自分の言葉で表現しないと分からない、伝わらないので「なあに？」と耳を傾けている③ 「急に叫んだりするとびっくりするよ。A君と遊びたかったの？」と気持ちを聞いたり、「一緒にお山作ろうよ」と遊びに誘ったりしながら気持ちに寄り添った③ 落ち着いたトーンでケンカの訳や両方の気持ちをゆっくり聞き、どうしたらいいのか子ども同士で話し合うようにした
	気持ちを受け止める	「少ししかプールに入れなかったね、明日はお弁当早く食べていっぱい遊ぼうね」と気持ちを受け止めていた④ 給食の時はどうすべきか、大切なことを優しく伝え、気持ちを受け止めて指導していた④
	ほめる	一人で出来たことに心から褒めることで自信を持たせている③ 「すごいね、がんばったね」等と褒める、頑張ったことを認める⑤ 「大きいのが作ったね」「かっこいいね」と声かけ、褒める③ 「ほら出来たやん！すごい、○○ちゃんにも教えてあげて」と声かけ、出来たことを褒める⑤
		「T君今頑張っちゃう。頑張っちゃう。えらいよ。」と言葉かけ④ 保育者の説明と違っていても「惜しい」「ダイナミックでかっこいい」など肯定的な言葉で表現している
		嬉しい気持ちを共感する時はギュッと抱きしめている⑤
		嬉し
	見守り	子ども同士のトラブルが起こった際には必要以上に間に入らず、手が出るなどの危険がない限り見守る③ 一緒に個室に入り見守る③
		遠くから子どもの姿を見守って、出来るだけ自分自身で身支度を始めるのを待つ④
適時に声掛けをする	子どもの興味を引く、分かりやすく言う	プールで「今から忍者になって潜ります」と言う⑤ スイミングで深い所まで潜る時「忍者になったつもりで見つからないように隠れて泳いでみよう」と子どもに分かりやすく言う⑤ ブラックベリーの赤い実と黒い実の説明を分かりやすく説明③ 「皆の心の中に恥ずかしくなるモジモジ君がいるみたい、モジモジ君にさよならしよう」と声かけ、恥ずかしい気持ちにさよならをした④ 植え方を土のお布団にたとえて分かりやすく伝えていた④ 「～せないかん」ではなく、「おかずのお皿ぴかぴかですごいね、ご飯もできるかな」と声をかける⑤ 「教えてあげてるのにお友達に怒られたら嫌な気持ちになるろう？これからからは優しく言うちゃってね」と言葉かけ④ 子どもが気になっているものを一緒に見に行き「へりコプター通ったね」「おたまじゃくし足はえてたよ」と楽しむ④ あえて小さな声や口パクで静かにしましょうと呼びかけた④ Aちゃん達もBちゃん達も先生と遊びたいって言うけど、どうしたらいいと思う？と子ども達に問いかけた④ 「使い方が合ってるかな？」と声をかけたり、自由遊びの前に約束事について「何で先生の見えない所に行っちゃいけないんだっけ？」と声をかけたりしていた④
		食べれんと言う子に「これなら食べれる？」と大根おろしを寄せて声をかける
		食べれないと言う子に「まず1口食べてみよう。美味しいかもしれん」と励ます声かけ
		「これはこうやってこうするんだよ」とか「大丈夫。先生待っているから」など自分で出来るような声かけ③
		食べ
		食べ
		食べ
		食べ
		食べ
		食べ

子どもの人間関係を把握して声掛けする	その時その時に声をかけ一斉に伝えるよう繰り返しした⑤ 「この穴をつないでみたら？」と声かけ⑤ まずは本を見て折ってみて、分からなかったら来てねと声かけ⑤ 「どうやるがやったかね？さっき○○先生なんて言いよった？思い出してやってみて。S君なら出来るはず！」と言葉かけ⑤ 形が作れない子どもに「大丈夫できるよ」「ここが少し違うかな」の声かけをする④ 「A君とB君とどっちが先に準備が終わるかな」と声かけ④ 算数プリント問題の解き方を、積み木などを使いあきらめず繰り返し取り組むようにする⑤	お手伝いをお願いする 自分のおもちゃを片付け終わった子にはおもちゃが落ちていないか、パトロールしてきてくれる？と聞く④
一人一人の特徴を知って声掛けする	食事の時も全員を気にしながら見て声をかけている。一人一人の子どもの特徴を知って、対応している 個人差が大きいので一人一人に適切な援助をする③ 他の子たちに関わる時よりも、近い距離で話をする⑤ その子の興味のある話や、よく遊んでいる遊びを見つけて、話しかけたり遊びに誘う⑤ 「これ食べられる？」「後でどれくらい食べられているか見に来るからね」など声をかけたり、大きいものを小分けにしたりする③ 「荷物を先にしようか」ではなく「友達と遊びたいね。虫を触りたいね。けど○○ちゃんの荷物がずっと机の上にあったら次に来る友達の荷物が置けなくて、友達が困るかもしれん」と声掛けの仕方を変える⑤ 「A君着替えますみよる？」などと声掛け⑤ 保育者は二人の席を離し、一人の男児を保育者の近くの椅子に座るよう促す④ なるべくAくんの近くに行き多くのコミュニケーションをとった⑤ 「ピザを作ってみようか」と声をかけ、画用紙がある場所で「どの色にする？」と問いかけていた④ 遊びに誘う⑤ 「この本先生が守っちゃくき。また後で遊びや」と声掛け④ 子どもの全ての要望や思いにこたえるのではなく、答えつつも区切りをつけるというタイミングを見ている④	明るく挨拶する 登園時、一人一人に明るくおはようと言葉を交わしていた 感情をこめて伝える 読み聞かせの時、声に抑揚があり感情がこもっていた 少しの変化でも声掛けする 髪を切ったり結んだりしてきた子に「似合ってる」「かわいい」「かっこいい」などと変化に気付いて声掛けをする 失敗にやさしく声掛けする パンツでトイレトレーニング中の子が失敗しても「間に合わなかった？」と優しく声掛けをする
遊びを楽しむ	一緒に行動する イザコザの度に相手の気持ちを考えることを一緒にしてゆく⑤ トイレトレーニングを始めたばかりで嫌がる子には「先生もするから一緒に行こう」と誘う お弁当の時間に一緒に机で食べている⑤ プールで水への抵抗をなくしていけるよう、一緒に肩まで水に浸かったり、水のかけ合いをしたりした⑤ 体を動かす活動が苦手な女の子には笑顔で声をかけ一緒に活動している 保育者が一緒に財布やお金作りをする⑤ 一緒に楽しむ 「先生に泥投げを3倍返しで！」と子どもたちと泥投げをしていた⑤ プール遊びで無理をさせず、その子のペースでゆっくりついでにいけるよう関わる③ 子どものペースを大事にしてかかわる 無理に友達と遊ぶことを勧めるのではなく「この絵本おもしろい？」と声掛けをして距離を縮める④	

	やって見せる	筒とカラーセロファンで望遠鏡を作ってみせた⑤ 「先生が先に味見してみよう」と食べおいしい表情を見せる③ プール遊びを先生が実際にやって見せる③
集団行動を促す	次の行動を知らせる	今からプールがあるから片付け頑張ってね、と次の行動を知らせながら片付けを促す④ 子どもが理解できるように「今から1番にトイレに行く。2番に椅子を持ってくる。3番に・・・」などと順番を付けながら何度か繰り返し説明していた③
	けじめをつける・切り替えをする	「仲間で使えんならダンボールは禁止する、もう今日はダンボール遊びは終わりにする」と片づけた④ 泣き続けている子と一度別の場所に行き、だっこして気持ちを落ち着かせ、別のものを見せて気分転換させた⑤
	注意する	昼食時、スプーンで遊んでいる子に注意する③
	目標を臨機応変に変更する	ゲームのめあてを「友達とゲームを楽しむこと」に変更した
環境構成を工夫する	環境構成を工夫する	より家らしく棚でままとコーナーを囲い、フライパンお弁当箱などを置く③ 製作行動の苦手な子にもわかるように実物の5倍の見本で説明していく ある日、部屋におもちゃを何も出してない日を作った⑤ テントからブルーシートを下げたものを赤土の山側に置いた どこに置けば子どもの目に入りやすく手に取りやすいかを考え、環境を構成する 子どもたちは今日どんな遊びをするのか、その遊びをどう広げていくのかを予想し構成する 子どもが窮屈だと感じないよう素材やテープ、カラーペンの置く場所を工夫していた⑤

(9) 〈失敗にやさしく声掛けする〉

内容には「パンツでトイレトレーニング中の子が失敗しても‘間に合わなかった?’と優しく声掛けをする」ことが挙げられた。子どもに「ダメ」等と否定的な言葉は自己肯定感を損なうことに繋がる。失敗しても優しい言葉がけによって、次へのステップアップを見通している。

4) 『遊びを楽しむ』

本カテゴリーには、4つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈一緒に行動する〉

内容には「トイレトレーニングを始めたばかりで嫌がる子には‘先生もするから一緒に行こう’と誘う」その他を挙げていた。子どもは、保育者が一緒だとすごく安心する。そうした子どもの心理を理解し、必要に応じた適切な対応が行われている。

(2) 〈一緒に楽しむ〉

内容には「‘先生に泥投げを3倍返しで!’と子どもたちと泥投げをしていた」ことを挙げていた。保育者と遊ぶことが楽しいという子どもたち

に、全身で対応している姿が見える。

(3) 〈子どものペースを大事にしてかかわる〉

内容には「プール遊びで無理をさせず、その子のペースでゆっくりついていけるよう関わる」その他が挙げられた。大人が、子どものペースに合わせ、自由に好きなことをさせることによって、子どもの成長につながるよう関わっている。

(4) 〈やって見せる〉

内容には「筒とカラーセロファンで望遠鏡を作ってみせた」その他が挙げられた。子どもは目の前で保育者がお手本を示してくれることで、教わったことを聞いて学び、見て学ぶことができる。

5) 『集団行動を促す』

本カテゴリーには、4つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈次の行動を知らせる〉

内容には「今からプールがあるから片付け頑張ってね、と次の行動を知らせながら片付けを促す」等が挙げられた。子どもの立場からすると、大枠が先に示されて、次に具体的内容がつかめる指示があると、スムーズに気持ちよく、次の行動を開始することができ、自分に求められていることがはっきりわかる。

(2) 〈けじめをつける。切り替えをする〉

内容には「‘仲間で使えんならダンボールは禁止する、もう今日はダンボール遊びは終わりにする’と片付けた」等が挙げられた。けじめをつけることや、気持ちの切り替えをすることはしつけの一環でもある。

(3) 〈注意する〉

内容には「昼食時、スプーンで遊んでいる子に注意する」ことが挙げられた。3歳児は、言われたことの意味が理解できるため、食事中遊ばずきちんと食べることの注意が行われている。

(4) 〈目標を臨機応変に変更する〉

内容には「ゲームのめあてを‘友達とゲームを楽しむこと’に変更した」ことが挙げられた。現場では、指導案通りにいかないことが多く、常に臨機応変に対応することが求められている。

6) 『環境構成を工夫する』

本カテゴリーには、一つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈環境構成を工夫する〉

内容には「どこに置けば子どもの目に入りやすく手に取りやすいかを考え、環境を構成する」等が挙げられた。子どもは、声かけなどの人的環境、用具や家具の間取り等の物的環境、自然・社会の事象、雰囲気等が相互的に作用する中で成長し、発達していく。子どもに合わせた環境づくりで、子どもが主体的に活動できる状況をつくりだすための工夫が行われている。

4 子どもの変化(表4)

子どもの変化の側面は、8つのカテゴリーに分類された。

1) 『主体的に行動する』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈自分から行動するようになる〉

内容には「援助により少しずつ食べられて、食べられた事を保育者に褒めてもらい自信をつけていく」その他が挙げられた。一人一人の子どもが、自分の思いや考えをもって活動している。

(2) 〈納得して行動するようになる〉

内容には「落ち着いて片付けをし、周りの子どもも納得して部屋に戻った」その他が挙げられた。子どもの心は、十分に理解し得心して取り組むことによって満たされる。

(3) 〈言われた行動が出来るようになる〉

内容には「思い出しながら手で土を掘って、つるを寝かせて植えるという作業がしっかりできていた」その他が挙げられた。子どもは、一度説明されたことをしっかり覚えていて、自分なりに考えてそれを行動に移している。

2) 『最後まで頑張る』

本カテゴリーには、2つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈最後まで集中するようになる〉

内容には「保育者の行う読み聞かせ時、全員が最後まで集中して聞いている」ことを挙げていた。子どもは夢中になれば、集中する。夢中になるような読み聞かせが行われている。

(2) 〈工夫しながら完成させるようになる〉

内容には「本を見て試行錯誤しながら完成させた」「途中まで折った手裏剣を持って‘先生作って’と来たが、途中まで出来たことを認め完成させた」ことが挙げられた。完璧でなくても、作品を最後まで完成させることによって、達成感を味わうことができ、スキルアップにつながる。

3) 『一緒に行動できる』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈一緒に行動できるようになる〉

内容には「全く動こうとしなかった女兒が、静かに頂き保育者に手を引かれ一緒に次の活動に移れた」「一緒に泥の中に入って感触を楽しめるようになった」ことが挙げられた。子どもは、頼りにする保育者が一緒だと安心でき、一歩踏み込んだ活動もできる。

4) 『遊びを楽しむ』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈友達と遊べるようになる〉

内容には「少しずつ一緒に遊びを楽しむことが出来るようになっていた」「手が出てしまうのは無くならないが、友達に‘入れて’と言えた」その他が挙げられた。遊びを通して、他者との関わりをもち、集団でふるまう中で社会性やコミュニケーション能力、言葉の力等を身につける。

(2) 〈遊びを発展させ楽しむようになる〉

内容には「Bちゃんが鬼ごっここと変身ごっこを混ぜたやつをやろうと提案し、Aちゃん達も賛成し2グループ合体して遊びを楽しんだ」等が挙げられた。子どもは、遊びながら、自分たちでルールを作り、自分たちで遊びやすいように発展させ

ていく。そうした遊びの中でアイデアが生まれ、想像力が養われていく。

(3) 〈嬉しそうになる〉

内容には「うんていが出来ないが少しずつ笑顔が見られるようになった」「嬉しそうで達成感を感じているように感じた」ことが挙げられた。「できた!」「うまくなった!」と達成感や自信を持って、子どもはどんどん成長していく。

5) 『気持ちを切り替える』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈気持ちを切り替えるようになる〉

内容には「子どもは気持ちよく切り替えができた」「子どもは満足し、気持ちの切り替えができている」ことが挙げられた。子どもは時間の感覚があいまいで、予定通り行動することが苦手なため、自己コントロールも上手とは言えない。それ故、予定の見通しを伝えたり、終わりの時間を一緒に決める等によって、気持ちの切り替えを図ることができれば、満足感を得ることができる。

6) 『思いを共有する』

本カテゴリーには、1つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈友達と一緒に気持ちを持ちたいと思うようになる〉

内容には「先生の小さな声に気付いた子どもが周りの子どもに声をかけて静かになった」「チームで勝ちたい気持ちが生まれてきた」その他が挙げられた。思いを共有することで、一体感が生まれ、集団の中の個人の役割に気付く基礎が芽生える。

7) 『お互いの気持ちを大事にする』

本カテゴリーには、2つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈相手の気持ちを考えられるようになる〉

内容には「保育者が間に入ることで子どもは相手の気持ちに気付きおもちゃを譲る様子が見られ

た」等が挙げられた。自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解したりして社会性が身に付いてきている。

(2) 〈謝れるようになる〉

内容には「泣いていた A ちゃんに‘ごめんなさい’と謝ることができた」ということが挙げられた。「ごめんなさい」という言葉は「ありがとう」と同じように大切であり、それが素直に言える子に育って欲しいというのが、保育者の願いでもある。

8) 『言語的スキルを習得する』

本カテゴリーには、5つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈自己主張するようになる〉

内容には「次第に自己主張できだしたが、何でも自分の思い通りにしたがってきた」ことが挙げられた。自己主張が強いのは、個性でもあり長所ともいえるが、集団行動では自己主張が強いと孤立する可能性が高く、短所が変わる事がある。

(2) 〈挨拶するようになる〉

内容には「恥ずかしがりながらも挨拶してくれるようになる」ことが挙げられた。子どもに日常生活の中で、挨拶等の生活習慣を取り入れることは大切である。

(3) 〈会話ができるようになる〉

内容には「‘なあに?’と聞くと小声で答えるようになった」「機嫌が直り会話ができた」ことが挙げられた。人は「慣れ」によって、持って生まれた部分を強化していくことができる。繰り返し同じことを行うことで、「慣れれば大丈夫」という気持ちへと変化していると思われる。

(4) 〈状況の説明ができるようになる〉

内容には「トラブルが起きたことを言う時には最初から状況を説明する姿が見られた」ことが挙げられた。トラブルが起きると、何をすればいいかわからない子どもに、そのやり方を説明することで、それが身に付くときちゃんと説明できるようになっている。

表4 子どもの変化

カテゴリ	サブカテゴリ	内容（＊　○数字は年齢）
主体的に行動する	自分から行動になる	援助により少しずつ食べられて、食べられた事を保育者に褒めてもらい自信をつけていく③
		「先生が食べる」と言うと同張って食べる
		友達と話しながらもどんどんご飯を食べ進め、完食、きれいになったお皿を嬉しそうに見せてくれた⑤
		入園時から比べると随分食べるようになった③
		子どもたちはすごい勢いで準備を始める④
	納得して行動できるようになる	子どもたちは忍者のような構えをして一斉に水に潜った⑤
		思い出しながら手で土を掘って、つるを寝かせて植えるという作業がしっかりできていた⑤
		子どもたちは忍者のような構えをして一斉に水に潜った⑤
		子どもたちは忍者のような構えをして一斉に水に潜った⑤
		子どもたちは忍者のような構えをして一斉に水に潜った⑤
最後まで頑張り	最後まで集中する	保育者の行う読み聞かせ時、全員が最後まで集中して聞いている
	工夫しなされるようになる	本を見て試行錯誤しながら完成させた⑤ 途中で折った手裏剣を持って「先生作って」と来たが、途中で出来たことを認め完成させた③
一緒に行動できる	一緒に行動できるようになる	全く動こうとしなかった女兒が静かに頷き保育者に手を引かれ一緒に次の活動に移れた④ 一緒に泥の中に入って感触を楽しめるようになった⑤
遊びを楽しむ	友達と遊べるようになる	少しずつ一緒に遊びを楽しむことが出来るようになっていた③
		手が出てしまうのは無くならないが、友達に「入れて」と言えた③
		ビザを作っている内に子どもたちが集まってきた、複数の子どもたちで楽しみながらビザを作る④
		上手にとうもろこしを食べたことを他の子どもたちに褒められ、注目を浴び、午後の外遊びの時から皆と一緒に遊ぶようになった⑤
		褒めてもらった子どもは嬉しそうに皆に見せていた。褒められている様子を見ていた周りの子どもも、遊びに入りたいと思ったり、自分も褒めて欲しいという思いになり遊びに参加することで少人数の遊びがだんだんと広がっていった
	遊びを発展させるようになる	Bちゃんが鬼ごっこと変身ごっこを混ぜたやつをやろうと提案し、Aちゃん達も賛成し2グループ合体で遊びを楽しんだ④
		他の友達と穴をつなげるだけでなく、パイプで水を流したりと遊びが広がり、発展していき楽しそうだった⑤
		ビザが完成した時皆でお店屋ごっこを始め、一人遊びから友達と遊ぶことに発展した④
		新しい興味を示し先生と同じように作ってもらったり、作っているのを見たりした後、自分たちで廃材やダンボールで楽しめた⑤
		日陰も作れ、子どもたちが隠れたり、的にしていた
嬉しそうになる	うんていが出来ないが少しずつ笑顔が見られるようになった⑤	
	嬉しそうで達成感を感じているように感じた⑤	
気持ちの切り替える	気持ちを切り替えるようになる	子どもは気持ちよく切り替えができた③⑤ 子どもは満足し、気持ちの切り替えができていく
思いを共有する	友達と一緒に気持ちを共有するようになる	先生の小さな声に気付いた子どもが周りの子どもに声をかけて静かになった④ チームで勝ちたい気持ちが生まれてきた⑤ 練習の途中でまた声が小さくなる子がいたら皆で「モジモジ君さよなら」をして元気に取り組んだ④
お互いの気持ちを大事にする	相手の気持ちを考えるようになる	保育者が間に入ることで子どもは相手の気持ちに気付くおもちゃを譲る様子が見られた③ 相手の気持ちを考えて行動できた⑤ トラブルになっていた子が自分の気持ちを伝えることでお互いの気持ちを理解しあい、自分たちだけで解決することができた④ 和気あいあいの雰囲気となり、いざこざはなくなった
	謝れるようになる	泣いていたAちゃんに「ごめんなさい」と謝ることができた④

言語的 スキルの 習得 する	自己主張するようになる	次第に自己主張でできたが、何でも自分の思い通りにしたがってきた⑤
	挨拶するようになる	恥ずかしがりながらも挨拶してくれるようになる⑤
	会話がでけるようになる	「なあに？」と聞くと小声で答えるようになった③
		機嫌が直り会話ができた③⑤
	状況説明ができるようになる	トラブルが起きたことを言う時には最初から状況を説明する姿が見られた④
	「しんとい」と言わなくなる	「しんとい」の言葉がなくなっていった⑤

(5) 〈「しんどい」と言わなくなる〉

内容には「‘しんどい’の言葉がなくなっていった」ことが挙げられた。相手を傷つけないように、忍耐強く振る舞い、自分のことよりも相手の気持ちを考えてしまうとか、ポジティブな考えができるなど、成長の姿ととらえることもできる。

5 学生が学べたこと（表5）

学生が学べたことの側面については、7つのカテゴリーに分類された。

1) 『一人一人を理解する』

本カテゴリーには、8つのサブカテゴリーがあった。

(1) 〈一人一人をよく見る〉

内容には「恥ずかしいという気持ちやなかなか言葉にすることが出来ない思いを保育者が理解し、子どもの気持ちを代弁したり、朝や帰りの挨拶を子どもの目を見てするなど保育者の関り方で、子どもの気持ちや行動が変わってくることを学んだ」その他が挙げられた。毎日一人一人を良く観察することによって、子ども理解を深めることができている。

(2) 〈発達を見る〉

内容には「他の子と比べず、子ども一人一人の発達を見ることが大切」その他が挙げられた。発達に応じて、対応が違ふことに気付いている。

(3) 〈子どもの個性を知る〉

内容には「子どもは好きなことや苦手なことが違い、一人一人個性がある」その他が挙げられた。子どもと関わる中で、それぞれの個性や特徴を把握することで大事なことを学んでいる。

（４）〈良いところを見る〉

内容には「子ども理解は、その子の良いところ、出来るところを見抜いていくことが大切」その他が挙げられた。子どもの自信につながる良いところを認めることの大切さに気付いている。

（５）〈子どもの行動の意味を知る〉

内容には「子どもは泣き続けていると本人も何が原因で泣いているか分からなくなることがある。泣きにはいろんな意味がある」その他が挙げられた。子どもの行動の意味を理解することの大事さを学んでいる。

（６）〈子どものペースに合わせる〉

内容には「軽い多動の子に興味の向いたものへの関心を尊重した」「全て手助けするのではなく、子どものペースに合わせた関わりを学んだ」等が挙げられた。子どものペースに合わせることの大事さを学んでいる。

（７）〈子どもの人間関係を知る〉

内容には「保育者は子どもの人間関係を把握した上で、子どもの様子を見て対応している」ことを挙げていた。子ども同士の関りや子どもの行動等を注視して、対応することの大切さに気付いている。

（８）〈男女差を知る〉

内容には「男女差が多くあり、男の子は比較的自由に作品を作り、女の子は仲の良い友達と同じものを一緒に作ることを楽しみたいという思いがある」ことを挙げていた。子どもの行動の中から、男女の性差による意識や行動に違いがあることに気付いている。

２）『興味や思いに寄り添う』

本カテゴリーには、７つのサブカテゴリーがあった。

（１）〈子どもの興味・思いに寄り添う〉

内容には「子どもの興味や思いに寄り添ったり、自発性を育てる援助」を挙げていた。子どもの興味や思いを大事にして援助することで、自発性を養うことの大事さを学んでいる。

（２）〈行動を見守る〉

内容には「子どもが自分たちで考えて行動する姿を見守りながら必要に応じて声をかけることが大切」その他が挙げられた。子どもの行動を見守りながら、主体性を育てることの大事さを学んでいる。

（３）〈問いかけて考えを促す〉

内容には「‘ああしてみれば？こうしてみれば？’」と全て答えを出すのではなく、‘どうしたらいいと思う？’と子どもたちに問いかけて考えるよう促すという方法もあることを学んだ」ことを挙げていた。子どもに考え、判断させるための問いかけ方法を学んでいる。

（４）〈思いを出させる〉

内容には「子どもが何を考え、何を訴えたいのか理解し、気持ちの表現方法を伝えることが大切」その他が挙げられた。子どもの思いを理解し、気持ちを表せる場や表現方法等の大事さを学んでいる。

（５）〈ほめる〉

内容には「出来たことを認めてもらうことで徐々に自ら進んで準備する習慣がつくことを実感した」「子どもの頑張っている姿には声に出して褒めることが重要」その他が挙げられた。ほめて育てることの大事さを学んでいる。

（６）〈話を聴く〉

内容には「子どもと同じ目線になって目を合わせながら話を聴くことも大切」であることを挙げていた。子どもと同じ目線になって対応することの大切さに気付いている。

（７）〈代弁する〉

内容には「トラブル時はお互いの思いを聞き共感し、保育者がお互いの思いを代弁することで、子どもたちも相手の思いを理解することができ、納得し、すっきりした気持ちで解決できることを学んだ」ことが挙げられた。お互いの思いを代弁という行為を通して、理解し合い、解決する道があることを学んでいる。

3)『気持ちを大事にする』

本カテゴリーには、7つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈子どもの立場に立って見る〉

内容には「子どもの気持ちを子どもの目線で考え共感する」等が挙げられた。子どもの気持ちに立って考えたり、共感したりすることの大事さを学んでいる。

(2)〈気持ちを理解する〉

内容には「心に寄り添うことができれば子どもも心を開いてくれる」「子どもの気持ちを理解し、その場で臨機応変に対応できることが大切」その他が挙げられた。子どもは、日々成長し気持ちも変化している。それをいろいろな形で保育者に伝えており、臨機応変な対応や専門知識の必要性を感じている。

(3)〈行動や気持ちを受け止める〉

内容には「保育者はどちらが正しいかを判断する立場ではなく、それぞれの子どもの思いを受け止めつつ、どうすればよいかを子どもたちに考えるよう促したり、一緒に考えたりすることも大切なのだ」その他が挙げられた。内面に目を向け、受け止めることや子どもに考えさせて判断することの大切さを学んでいる。

(4)〈共感する〉

内容には「子どもは気持ちの切り替えが難しいため、その子の気持ちに共感し、寄り添うことが大切である」その他が挙げられた。共感し、寄り添うことの大事さを学んでいる。

(5)〈表情から気持ちを汲み取る〉

内容には「表情や態度をよく見て何が嫌なのか何を望んでいるのかを読み取り、一人一人に合った対応が大事である」その他が挙げられた。子どもは、表情や態度に気持ちが表れることに気付いている。

(6)〈信頼関係をつくる〉

内容には「保育する上で大切なことは、子どものありのままの姿を受け止め信頼関係を築いていくこと」等が挙げられた。信頼関係の上に立って、保育することの大事さを学んでいる。

(7)〈待つ〉

内容には「子どもがしっかり伝えられるまで待ったり、子どもの気持ちを察することが、子ども理解の上で大切なこと」を挙げていた。子どもの気持ちを察し、待つことの大事さに気付いている。

4)『自発性を促す』

本カテゴリーには、5つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈次の活動を伝える〉

内容には「次の活動を伝えることで次の楽しみができて積極的に片付けが進む」その他が挙げられた。子どもに次の行動を示すことで、心の準備ができることを学んでいる。

(2)〈きっかけを作る〉

内容には「保育者の援助とはただ子どもと遊んだり手助けするだけでなく、子どもが自分で考え気付くことが出来るようきっかけを与えることでもあることを知った」その他が挙げられた。きっかけ作りも援助の一つであることを学んでいる。

(3)〈楽しめる工夫をする〉

内容には「初めての経験や子どもがいかに楽しめるようにするかが重要」等が挙げられた。子どもが楽しめる工夫をするための声かけがあることを学んでいる。

(4)〈他の子の力を借りる〉

内容には「周りを注意できる子の力を借りて保育することを学んだ」ことを挙げていた。子どもの力を借りる保育があるということを学んでいる。

(5)〈やりすぎない接し方をする〉

内容には「自分でやりたい気持ちを持てるように促し、援助が行き過ぎないように接することがとても難しい」ことを挙げていた。保育者がやりすぎないようにすることの大事さに気付いている。

5)『効果的な声かけをする』

本カテゴリーには、3つのサブカテゴリーが

表5 学生が学べたこと

カテゴリ	サブカテゴリ	内容（※ ○数字は年齢）
一人一人を理解する	一人一人をよく見る	恥ずかしいという気持ちやなかなか言葉にすることが出来ない思いを保育者が理解し、子どもの気持ちを代弁したり、朝や帰りの挨拶を子どもの目を見てするなど保育者の関り方で、子どもの気持ちや行動が変わってくることを学んだ③
		日頃から子どもたちのことを観察し、一人一人の子どもたちと丁寧に関わっていくことが、子どもも理解へ繋がっていくのではないかと思う④
		3歳児の月齢差、個人差は激しい分、子どもを観察することが重要で、観察することで少しの変化にも気付くことが出来る③
		子ども一人一人の個性をしっかりと理解し関わっていけるよう毎日子どもたちの姿を見ることはとても大切である④
	発達を見る	他の子と比べず、子ども一人一人の発達を見ることが大切③
		3歳児は毎日初めての経験をし、新しい発見をしている③
		子どもの成長から学び、変化・成長に気付いて支えることが出来る。
		自分の思っていた子どもの姿や思いの違いを3歳児の子どもたちと関わり気付かされた③
	子どもの個性を知る	子ども同士のトラブルは年齢によって違うことを配慮した援助が必要③
		年少児はまず水に慣れ、恐怖心を取り除くことが大事③
		子どものことを知ることが大切。そこから援助が決まる③
		子どもは好きなことや苦手なことが違い、一人一人個性がある⑤
	良いところを見る	子どもと適切に関わるには一人一人の特性を把握し理解することが大切⑤
		同じ山作りでもそれぞれ思いが違い、楽しいと感じる場が子どもたちそれぞれ違う⑤
		内面を理解するためには子どもとよくコミュニケーションをとり、一人一人の特徴をつかんでいくことが必要③
		子どもの個性を一人一人考えて理解して援助することが大事③
	子どもの行動の意図を知る	子ども理解は、その子の良いところ、出来るところを見抜いていくことが大切④
		子どもの「出来た」が増えるように関わり、見守るのだと学んだ③
		子どもの頑張りを声に出して認めることで自信につながり、意欲的に取り組むようになる⑤
		子どもは泣き続けていると本人も何が原因で泣いているか分からなくなることもある。泣きにはいろんな意味がある③⑤
	子どものペースに合わせる	子どもの姿からその遊びの何を楽しんでいるのか理解して対応すると次の活動に移れる③⑤
		軽い多動の子に興味の向いたものへの関心を尊重した③
		全て手助けするのではなく、子どものペースに合わせた関わりを学んだ③
		子どもの様子で、時間がかかってもゆっくり進めることが大事。
	子どもの人間関係を知る	保育者は子どもの人間関係を把握した上で、子どもの様子を見て対応している⑤
		男女差が多くあり、男の子は比較的自由に作品を作り、女の子は仲の良い友達と同じものを一緒に作ることを楽しみたいという思いがある⑤
	子どもの興味・思いに寄り添う	子どもの興味や思いに寄り添ったり自発性を育てる援助④
		子どもが自分たちで考えて行動する姿を見守りながら必要に応じて声をかけることが大切⑤
		自分のことを分かってくれる先生がいるから大丈夫と、安心できる子どもたちが、折り合いを付けながら頑張っていく姿を支える援助が必要④
		子どもは自分で考えて行動する力を身に付けていくことが出来る④
興味や思いに寄り添う	行動を見守る	積み木は、考えて取り組むことや形を作った後で「できました」と主張することが大事なことで学んだ④
		「ああしてみれば？こうしてみれば？」と全て答えを出すのではなく、「どうしたらいいと思う？」と子どもたちに問いかけて考えるよう促すという方法もあることを学んだ④
	問いかけて考えを促す	

思いを出させる	子どもが何を考え何を訴えたいのか理解し、気持ちの表現方法を伝えることが大切
	思いを思いっきり出せる場を作ったり、ゆったり温かく見守りながら気持ちを落ち着かせることが大切④
	出来たことを認めてもらうことで徐々に自ら進んで準備する習慣がつくことを実感した④
	子どもの頑張っている姿には声に出して褒めることが重要⑤
ほめる	子どもに肯定的関心を寄せて見ていき、たくさん褒めて、自信を付けられるように援助したい④
	良い部分を褒めると、頑張てよかったという気持ちになる⑤
	子どもと同じ目線になって目を合わせながら話を聴くことも大切だ④
	友達に思いを伝えて関りを持てる援助が必要と気付いた⑤
話を聴く	友達に思いを伝えて関りを持てる援助が必要と気付いた⑤
	トラブル時はお互いの思いを聞き共感し、保育者がお互いの思いを代弁することができ、子どもたちも相手の思いを理解することができ、納得し、すっきりした気持ちで解決できるということを学んだ④
	代弁する
子どもの立場に立つて見る	子どもの気持ちを子どもの目線で考え共感すること③
	子どもの立場に立って考えると子どもの本当の気持ちに気付く理解できる③
	普段自分の思いが言える子も感情が高まるとうまく伝えられないことがある④
	子どもの立場になることで、何で怒っているのか泣いているのかなど、子どもの思いにだんだん気づき理解することが出来る④
気持ちを理解する	心に寄り添うことができた子どもも心を開いてくれる⑤
	子どもの気持ちを理解し、その場で臨機応変に対応できることが大切
	子どもの気持ちを理解することは難しい。日々ちょっとしたことで気分が変わるので全て理解は出来ないと感じた
	よい保育をするためには子どもの気持ちを理解することから始まる⑤
気持ちを大事にする	個々の子どもの行動や内面を理解し、心の動きに添って保育を展開し、心と身体の発達を促す援助で子どもはありのままの自分を表現できる⑤
	子どもは、心の中でいろいろ思っていて、いろんな形で保育者に伝えてきている⑤
	子どもの行動を受け止め、言葉に出来ない内面でも目を向けて関わっていくことが大切③
	保育者はどちらが正しいかを判断する立場ではなく、それぞれの子どもの思いを受け止めつつ、どうすればよいかを子どもたちに考えるよう促したり、一緒に考えたりすることも大切なのだ④
共感する	子どもは気持ちの切り替えが難しいため、その子の気持ちに共感し、寄り添うことが大切である③
	頑張りをまず認めたり、共感から入ると自分の頑張りを認めてくれた、自分の気持ちを分かってくれたと思い、子どもたちは、次の行動に移してくれる⑤
	表情から気持ちを汲み取る
信頼関係をつくる	表情から気持ちを汲み取る
	表情や態度をよく見て何が嫌なのか何を望んでいるのかを読み取り、一人一人に合った対応が大事である④
	信頼関係が築けてから、一緒に遊びに参加して、楽しいと実感できるように援助することが大切⑤
	子どもの気持ちに共感することで警戒心が強い子どもも信頼関係が生まれる⑤
待つ	保育する上で大切なことは、子どものありのままの姿を受け止め信頼関係を築いていくこと⑤
	子どもがしっかりと伝えられるまで待ったり、子どもの気持ちを察することが、子ども理解の上で大切なことだ③
	次の活動を伝える
自発性を促す	次の活動を伝える
	次から何をするのかや、そのために何を準備するのかなど、丁寧に子どもに伝えることが大切だ⑤
	きっかけを作る
	相手の思いを代弁したり、一緒に考えたり、提案したりするとよい④

		保育者の援助とはただ子どもと遊んだり手助けするだけでなく、子どもが自分で考え気付くことが出来るようきっかけを与えることでもあることを知った④
		友達と遊びたいのに自分から関われない子どもにも目を向け、気持ちを考えて、きっかけを作る対応や、認められることの大切さを学んだ⑤
		様子を見て声をかけるだけでなく、区切りを付けて切り替える機会を与えることも一つの援助であることを知った④
		子どもたちの遊びが広がるようなきっかけを作り、自主的に遊べる空間づくりなど様々な援助があることが分かった⑤
楽しめる工夫をする		初めての経験や子どもがいかに楽しめるようにするかが重要③
		子どもが今からやろうとしていることを楽しめるようにする声かけ、関わりで場が左右される⑤
他の子の力を借りる		周りを注意できる子の力を借りて保育することを学んだ⑤
やりすぎない接し方をする		自分でやりたい気持ちを持てるように促し、援助が行き過ぎないように接することがとても難しい⑤
効果的な声かけをする	メリハリをつける	注意する時はしっかり注意し、メリハリをつけ、子どもが気持ちを切り替えられる援助が大切④
	分かりやすい声かけをする	子どもが理解できるように分かりやすく伝えることが大切⑤
		声かけのタイミング、声のボリューム、トーンなどを意識して話の流れをつかみテンポよく話すことが必要⑤
		子どもに聞こえやすい声でゆっくり聞き取りやすいように言葉がけすることが重要③
		イメージしやすい言葉がけをすることが、子どもが楽しく活動に取り組めるようになることを学んだ④
		すべてを教えてしまうのではなく、子どもが自分で考えていけるような言葉がけをすることが大切④
	子どもにあった声かけをする	ほめること、見守っていると伝えることなど、言葉がけ1つ1つに意味がある③
		子どもが成長できるような言葉がけをしないと③
		生活の中で初めて出会うことが多い子どもに、不安を取り除き活動を十分楽しめるような声かけ、援助が大切③
		少し手を貸したりし、子どものやる気が出る声かけが大切③
		子どもの架け橋になれるように声かけすることが大事
		一人一人の子どもにあった声かけをすることに大きな意味がある⑤
		声かけ一つで子どもの気持ちは大きく変化する⑤
		何度も何度も繰り返して、声かけをすることが大切③
		効果的な声かけや必要に応じて援助をすることで、子どもたちの活動や意識が変わっていくことを学んだ③
		保育者の言葉で、子どもの可能性を引き出すことができるのではないかと考えた④
		保育者が笑顔で明るい声で言葉がけをしながらかしめることで、子どもたちの気持ちを盛り上げ、思い切り泥の感触を楽しめた⑤
		保育者の日常的な言葉がけや行動の一つ一つが子どもの楽しい生活や成長を支えていると感じた④
		担任が「倍返し！」と明るく言葉がけをすることで、子どもの意欲を高め、子どもが楽しめることができた⑤
		言葉がけの仕方、子どもの活動が変わる④
		保育者の声かけ一つで、子どもたちの準備への意欲が高まり、楽しみながら準備ができることを学んだ④
保育者に必要な力がわかる	指導案を工夫する	指導案を作るとき、その活動が苦手な子どもを中心に作るという
		子どもたちに何を学び体験して欲しいか明確にイメージすることが大切
	環境構成を工夫する	クラスの子たちの特徴を知って楽しめるゲームを選ぶことが大切④
		環境構成の工夫によって、子どもたち自身が遊びの展開や生活習慣を身につけることに繋がると感じた③

		おもちゃの置き場所を毎日変えるだけで違った遊びができる④
		ままごとスペースを作り、遊び用具をまとめて置くことで分かりやすくなった④
		安心して遊べる環境を作ることで苦手意識があっても楽しい気持ちで遊ぶことが出来るし、ヒントを得て遊びが広がる
		子どもがしたいと思ったらずぐ道具や教具、材料を選んで手にとることができる環境を用意することが大切
		いつもとは違う別の遊びを提案することで子どもの発想も遊びも深まっていく。保育者の環境構成は子どもの遊びを広げる上でとても重要⑤
		部屋に物を置かず、子どもたちが自分からしたい遊びを見つけ、自主的に遊べるようにすることで、主体性や一つのことに集中できるようにしているのだと思った⑤
		子どもが何を望んでいるのかどうすればもっと楽しめるのか、素材や環境作りが大切に関わりを通じて感じていくことが保育者に必要④
		子どもの遊びを広げるために工夫したことで、みんなで楽しめる活動に変わっていった④
保育者の姿勢を理解する	保育者の責務を知る	小さい時からの積み重ねが将来の基盤になると思った③
		繰り返して注意を言わざるを得ないこともあるが保育者の責務と言われた③
		子どもの前に立つ時や関わる時には正しい言葉の使い方が必要⑤
		保育者の援助の積み重ね、一貫性が大事だと気付いた③
		保育に100%の正解は存在しないと教わった⑤
周りの協力がある		ダメなこと、良いことを子どもに伝えることと、何がいけなかったのかを伝えることで、子ども自身が理解して、次に活かせることを学んだ④
		保育者や周りの先生との協力があってじっくり考えられる③

あった。

(1) 〈メリハリをつける〉

内容には「注意する時はしっかり注意し、メリハリをつけ、子どもが気持ちを切り替えられる援助が大切」であることを挙げていた。注意する時は、子どもが気持ちを切り替えられるようメリハリをつけることが大事だと気付いている。

(2) 〈分かりやすい声かけをする〉

内容には「子どもが理解できるように分かりやすく伝えることが大切」「声かけのタイミング、声のボリューム、トーンなどを意識して話の流れをつかみテンポよく話す」必要性等が挙げられた。子どもが理解しやすいように伝える声かけの技術や方法を学んでいる。

(3) 〈子どもにあった声かけをする〉

内容には「一人一人の子どもにあった声かけをすることに大きな意味がある」「声かけ一つで子どもの気持ちは大きく変化する」その他が挙げられた。効果的な声かけは、子どもの成長を支え、可能性を引き出すという極めて重要な意義がある

ことを学んでいる。

6)『保育者に必要な力が分かる』

本カテゴリーには、2つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈指導案を工夫する〉

内容には「指導案を作るとき、その活動が苦手な子どもを中心に作るといい」「子どもたちに何を学び体験して欲しいか明確にイメージすることが大切」等が挙げられた。指導案は、クラスの特徴を考え、目標を定め確かにイメージして立てることの大事さを学んでいる。

(2)〈環境構成を工夫する〉

内容には「環境構成の工夫によって、子どもたち自身が遊びの展開や生活習慣を身につけることに繋がると感じた」等が挙げられた。子どもの環境構成が与える影響の大きさを理解し、その大切さを学んでいる。

7)『保育者の姿勢を理解する』

本カテゴリーには、2つのサブカテゴリーがあった。

(1)〈保育者の責務を知る〉

内容には「子どもの前に立つ時や関わる時には正しい言葉の使い方が必要」その他が挙げられた。保育者の役割や責務の重要性について学んでいる。

(2)〈周りの協力がある〉

内容には「保育者や周りの先生との協力があるてじっくり考え関われる」ことを挙げていた。保育における協調性やチームワークの大切さを学んでいる。

6 結果のまとめ

5つの側面から明らかになったことをまとめると、学生たちは、園の1日の流れの中で様々な場面で子どもと関わり、遊びや身支度、食事、排泄、行事や学習等を通して多くの学びを得ているということである。子どもたちは、遊びを楽しみ遊びの中から多くのことを学んでいる。その遊びや行

動にも個人差があり、時にはイザコザが発生したり、やりたいことが思うようにできず落ち込んだりする姿も見られる。保育者は、そうした子どもたちと遊びを楽しみながら、子どもたちの気持ちに寄り添い、見守り、適時に適切な声かけを行っている。その際、集団行動を促したり、環境構成を工夫したりして、常に個々の子どもの成長に配慮している。保育者の願いでもある主体的な行動や最後まで頑張る子ども、相手の気持ちを大事にする子どもの姿が見られている。また、集団生活を通して、社会性が身に付き言語的スキルの習得もできている。

学生たちは、そのような子どもたちの姿や保育者の支援を目の当たりにして、大学の授業では学ぶことのできない気付きや学びを得ていた。

特に、一人一人の子どもについて、個性や発達の様子などを理解するという子ども理解や子どもの興味や思いに寄り添うこと、子どもの気持ちを大事にすること、効果的な声かけ、自発性を促すことの大事さ等を学んでいる。また、環境構成の工夫や支援の内容方法等保育者の力量を高めることや保育者の責務についての認識も深めていた。

V 考察

以上の結果を踏まえ、学生が捉える子ども理解や保育者の支援、環境構成、保育者の役割と責務という領域に関して考察を加えていく。

1 子どもの立場になって考えること

学生たちは、実習に際して、「遊びを通して、子どもを理解する」「観察する」「発達段階による接し方」「信頼関係を築く」「トラブル対応の仕方」「子どもに寄り添う保育」「声掛けの仕方」等々の問題意識をもって実習に臨み、各自がそれぞれの視点から子ども理解の内容を把握し、意識を深めている。

子ども理解の視点でいえば、最も大事なことは、子どもの立場に立って考えるということである。学生は、表1で示したとおり、身支度や遊び、給食、排泄、学習や行事、環境構成、個別支援等の場面を挙げているが、これらの場面ではいずれも

子どもの立場に立って考えることが求められる。

学生の子ども理解はできているかどうかについては、表5の学生が学べたことのカテゴリー『一人一人を理解する』の中のサブタイトル〈一人一人をよくみる〉〈発達を見る〉〈子どもの個性を知る〉〈良いところを見る〉〈子どもの行動の意味を知る〉〈子どものペースに合わせる〉〈子どもの人間関係を知る〉〈男女差を知る〉に挙げている内容から判断することは可能である。各内容を照らし合わせると、すべての項目において子ども理解で大事な子どもの立場に立って考える視点が学生の意識の中に存在していることがわかる。

先行研究²⁾でも子どもを理解したうえで指導することの重要性や子どもの姿に合わせて柔軟に対応することについて「幼稚園実習におけるリアリティショックと保育に関する認識の変容」の中でも触れられている。

そこで、子どもを理解したうえで指導することの重要性や子どもの姿に合わせて柔軟に対応することについて、どれだけ学生が気付き、学びがあるか見てみる。表5のカテゴリー『興味や思いに寄り添う』『気持ちを大事にする』『自発性を促す』『効果的な声かけをする』に関するサブカテゴリーの大半の内容が、それに関するものであり、学生はそうしたことについての理解と認識が深まっていると思われる。

なお、子ども理解について、杵島³⁾は臨床的理解と教育的理解があり、教育的理解の側面を意識することが重要であるという。教育的理解とは、臨床的理解から更に発展して子どもが成長・発達に必要な体験ができるよう個々の状況に応じた環境構成や援助を考えるための資料となるもので、観察して事実をとらえるというだけでなく、その事実の解釈や考察も含んでいるという。その考えに立てば、一つは保育場面という様々な要素が絡み合った状況を観察する時に、保育者の視点が明確でなければならない。二つは、子どもをありのままに捉えて容認するだけではなく、その事実を解釈し、保育者が保育の中の様々な現象を考察する力を持つことが保育の質の向上には欠かせな

い。三つは、目の前でくりひろげられる現象に対する分析的視点と自らの援助とを関連付けて考察しなければならないことになる。すなわち、教育的理解の構造をつかんでではじめて問題の本質に迫ることができるのである。

確かに学生の発表原稿では、臨床的理解は十分行われていると思われるが、教育的理解の側面を意識しながら「子どもをみる目」を磨くことについては、不十分さはぬぐえない。この点については、今後本学の教育内容の改善点として、検討を加えていく必要がある。

2 子ども遊び等の支援に適切な技術や方法を取り入れること

保育者の子どもへの働きかけから学生は、何を学んでいるのかと言えば、子どもへの接し方を含め、保育者の技術・方法・内容である。

高橋⁴⁾の幼稚園教育実習における学びに関する研究がある。それによれば、学生が実習で「学んだことは何か」と10項目を挙げ質問しているが、2年生の教育実習では4割余りが「保育者の技術・方法・内容」だと答えている。

保育者の働きかけについては、表3の保育者の働きかけで取りあげた『子どもの気持ちに寄り添う』『見守り』『適時に声かけをする』『遊びを楽しむ』『集団行動を促す』『環境構成を工夫する』の6つのカテゴリーについて触れることにする。

保育者の技術や方法に関しては、サブカテゴリーとして〈気持ちや理解を確認する〉〈気持ちの代弁をする〉〈子どもの気持ちを聞く〉〈気持ちを受け止める〉〈ほめる〉〈ハグする〉〈見守る〉〈子どもの興味を引く、分かりやすく言う〉〈できそうな提案をして励ます〉〈お手伝いをお願いする〉〈子どもの人間関係を把握して声掛けする〉〈一人一人の特徴を知って声掛けする〉〈明るく挨拶する〉〈感情をこめて伝える〉〈少しの変化でも声掛けする〉〈失敗にやさしく声掛けする〉〈一緒に楽しむ〉〈子どものペースを大事にしてかかわる〉〈やって見せる〉〈一緒に行動する〉〈次の行動を知らせる〉〈けじめをつける・切り替えをする〉

等が該当する。

それらの内容から明らかなように、学生たちは、現場で実践する保育者の子どもへの働きかけから学んだことが実習の最大の成果といえる。

平成29年告示の幼稚園教育要領¹⁾によれば、幼稚園教育の基本として、遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であると述べている。そのように、特に、遊びの中での支援は、子どもの成長発達に大きな影響を与える。例えば『遊びを楽しむ』というカテゴリーの中の内容に「先生に泥を投げたら3倍返しで！」と子どもたちと泥投げ遊びを行う様子や「筒とカラーセロファンで望遠鏡を作ってみせる」等、楽しそうに遊ぶ保育者の子どもへの関りとテクニックは大切といえる。

実習は、学生がこれまでの生活や学習で身につけた知識や技術を、子どもの世界に身を置いて、保育現場で実践する機会であるが、子どもは常に変化し、成長しているので臨機応変な対応が求められる。また、現場での臨場感は、机の上の学習では到底味わうことはできず、現場体験を通して理解を深めたり学び直したりして実践力を身につけることになる。すなわち、保育者の実践内容や方法等は、現場の保育者から学ぶことになり、その学びが大きな学習成果としてあらわれる。そこで大事になるのは、養成校と実習先の共通認識と連携である。

高橋ら⁵⁾は理論と実践、研究者と教育現場は、共に子どものために奉仕する義務を負い、「理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である」と言う。そのように、養成校と保育現場は本来、連携して教育研究を行うことが期待されている。そこで保育理念・理論に基づいた実践指導力を高める方法として、単位化された教育・保育実習以外に保育現場で実践されている年間行事計画に直接参加して、大学で学んでいる理論や専門的な技術を可能な限り現場で実践しながら学ぶ体験学習が効果的であると述べている。それに関して、開講している授業科目「幼児体育Ⅰ」の一部を、大学付属幼稚園と緊密な連携を取りながら幼児教

育現場で実施している養成校もある。⁶⁾

そのように養成校の大学と教育現場の幼稚園が共通認識を図り連携していくことは、本学教育の今後の検討課題といえる。

3 より良い環境を整えること

環境の構成、特に物的環境と空間的環境については、特に大切な視点だが、一般的に意識から抜けがちなところである。

平成29年告示の幼稚園教育要領¹⁾の総則には、幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことを基本とする、と述べられている。

近喰ら⁷⁾は、保育環境づくりを考える際、子どもが自ら「遊んでみたい」と意欲的にかかわることができる環境を設定することが重要である。子どもが安心して過ごすことができ、五感を刺激する物的環境や自然環境が整っていることが大切であり、人的環境がどのような役割を果たすかも考えておかなければならない、と述べている。また、環境を考える際の注意事項として、①一人一人が集中して遊ぶことができる場所の確保、②動的活動スペースと静的活動スペースが分かれていること、③自分たちで遊びが展開できる、④友達と関わるができる、⑤遊びを見つけやすくなっている、⑥安心して遊ぶ場所の確保、⑦年齢にあった玩具の確保、⑧身体を思いっきり動かし遊ぶ場所の確保、⑨学びくつろげる場所の確保の9点を挙げている。

学生たちは、表3の『環境構成を工夫する』というカテゴリーの中の内容に「より家らしく棚をままごとコーナーを囲い、フライパンお弁当箱などを置く」「製作行動の苦手な子にもわかるように実物の5倍の見本で説明していく」「ある日、部屋におもちゃを何も出していない日を作った」「テントからブルーシートを下げたものを赤土の山側に置いた」「どこに置けば子どもの目に入りやすく手に取りやすいかを考え、環境を構成する」「子どもたちは今日どんな遊びをするのか、その遊びをどう広げていくのかを予想し構成する」「子どもが窮屈だと感じないよう素材やテープ、カ

ラーペンの置く場所を工夫していた」こと等を挙げています。これらは、うえの環境を考える際の注意事項のいずれかに該当しており、保育者の環境に配慮する姿勢がわかる。

遊びが成立する3要素は、空間・時間・仲間が保障されていることと言われる。そこで、子どもの状況に応じて、環境を再構築し子どもが主体的に活動できるようにするために、保育者が遊びの価値や意義をどのように理解し、主体的な遊びが展開される環境をどう設定するかについて、学生はより深い学びが必要である。その学びの場には、子どもがいて、物的・空間的環境、人的な要素や時間的要素、活動しやすい雰囲気等環境構成ができることが必要だが、本学の教育で充足することには限界がある。それ故、幼稚園の教育現場で、教師の役割を自覚した保育者から学ぶことが重要である。その学びを学内で発表という形で取り上げることによって、理解を深めることが現時点では有効な方法と思われる。こうした取り組みを続けながら、今後一層環境構成の工夫についての意識を深化させていく必要がある。

4 子どもの成長を支える役割を担うこと

福山ら⁸⁾は、実習の意義について、現場で子どもと接する中で、子どもの成長を目の当たりに見ることや、子どもと遊ぶことで子どもの世界観を感じることができたり、学生自身が子どもと一緒に生活することで感性が豊かになったり、成長することができるといったことを体験し、多数の学生が幼稚園教諭の仕事に楽しさを感じている。また、実習を経験した全員が、幼稚園教諭の仕事の厳しさや大変さを実感している、と述べている。

保育者は幼児が日々何を感じ、何に興味をもち、何を実現したいと思っているか、そのためにどのような経験が必要かをしっかりとらえ、計画的な環境構成や場面に応じた援助をする役割を担っている。学生は、実習の中でそうした保育者の役割や職責の重さを一定認識している（表5参照）。保育者は実践を通して、教職にかける情熱や使命感、幼児理解にもとづいた指導技術等を発揮し、

子どもの成長を支え、変化を生み出しており、学生は、その子どもの変化する姿を見て、保育者の姿勢をポジティブにとらえている（表4参照）。

田中⁹⁾は、保育者の役割について、保育者は常に自己の役割を認識し、より高い倫理観を持つことが必要である。保育は、保育者の一方的な子どもたちへの働きかけだけで終わるものではない。それは、相手の気持ちを理解し、自己も変容する保育者にとっての学習でもある、と述べている。

今回、保育者の役割について、学生は一定認識をしているが、保育者の倫理観についての記述は乏しかった。保育者の倫理観については、職務上特に重要であることから、本学の教育を通じて徹底することは可能である。今後、保育者の役割や倫理観の徹底を図るため、教育上の改善点について検討を加えることは大事である。

また、子どもの生活があるがままに受け入れ、子ども理解と信頼関係を築きながら、発達に必要な経験を子ども自ら獲得していけるように援助していける力を身に付けるためには、日々の保育の中でそれを実践し、実践を記録し、振り返ることが大切である。そこで、実習日誌や指導案、実習レポート等も活用して、実習で学んだことを演習形式の授業形態を取り入れて深める等、本学の教育方法や教育内容においても今後の工夫が必要と考える。

Ⅵ 本研究の限界と今後の課題

本研究は、対象児の年齢を考慮しないためであるために、年齢別視点での分析は行っていない。また、学生の発表原稿は、前述したように、子どものこと、保育者のこと、環境構成について学んだことを述べているが、それ以外のことについて学生は、ほとんど触れていない。専門科目等の学習指導に関することや保護者及び地域とのかかわり、保育者と学生との人間関係、実習に関する指導、例えば、指導案や日誌にかかる指導上の問題等について、学生は述べていない。そのため今回の研究結果から、本学の教育における指導上の問題点や課題を拾うことが難しく、そこに本研究の

限界がある。しかし、本学の幼児教育の実習のねらいやあり方は、表1から表5が示すように一定の評価をすることは可能だと思われる。

学生は、科目「教育実習の研究」をはじめ多くの専門科目を履修し、知識を習得し、技能を磨き、人間性を身につけて、保育者としての資質を養っている。そして、上述してきたとおり気づきや学びにおける成果もあげている。学生の視点の明確さや学び取る力においても深さや広がりが顕著に見られ、実習における教育効果は明確になったと考えている。

一方、本学教育の見直しや改善点については、本研究をもって結論付けすることは困難であり今後の課題であるとする。本研究の限界を踏まえたうえで、実習後実習園から本学に提出される要望や意見等も照らし合わせて検討し、問題点の整理や今後の実習における指導に役立てる必要がある。

謝辞

本研究に協力いただいた幼児保育学科の学生に心からお礼を申し上げます。また、高知学園短期大学梶本市子参与には、ご助言をいただき深く感謝します。

引用・参考文献

- 1) 平成29年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要

領, チャイルド本社, 2017, 6-109

- 2) 谷川夏実, 幼稚園実習におけるリアリティショックと保育に関する認識の変容, 保育学研究, 2010, 48 (2), 96-106
- 3) 梶島香代, 保育における幼児理解のあり方, 文京学院大学人間学部研究紀要, 2008, 10 (1), 69-82
- 4) 高橋真由美, 幼稚園教育実習における学生の学びに関する一考察(2), 藤女子大学紀要, 2009, 46, 113-118
- 5) 高橋哲郎・富永築・中村愛実, 精華女子短大研究紀要, 2006, 1-14
- 6) 木村達志・石山由美・松永有三, 保育者養成校(短期大学)と付属幼稚園との連携による幼児教育現場での幼児体育Ⅰの実施, 安田女子大学紀要, 2013, 41, 169-175
- 7) 近喰晴子・寅屋壽廣・松田純子編集, 保育実習, 公益法人児童育成協会, 中央出版, 2016, 1-265
- 8) 福山多江子・永井優美, 保育者養成における実習の意義, 東京成徳短期大学紀要, 2015, 48, 55-70
- 9) 田中達也, 幼児期における保育者の役割, 佛教大学教育学部学会紀要, 2012, 11, 103-11

受付日: 平成30年1月11日

受理日: 平成30年2月9日

Original Paper

The Ideal Measures of Educational Efforts by Analyzing the Features of Students' Awareness During Student Teaching

Kosaku HAMADA^{1*}, Kazuhisa OJIMA¹ and Yuka TAMURA²

Abstract: First-year-students belonging to the department of early childhood education and care are assigned a week's student teaching at a kindergarten in January, and second-year students are assigned the class of four weeks' student teaching at the kindergarten in June. This paper is the report with my review, on the result of analyzing the contents presented by the students as for what they learned through the student teaching as a guidance for the students after the student teaching in the course of "Study of Student Teaching". The subject of research is the announced documents which were written by the second-year students belonging to the department of early childhood education and care at Kochi Gakuen College.

The contents of the documents were extracted and classified into five points as for "the occasion," "the situation and condition of the children," "the effects which were made by their childcare taker," "the change of the children," and "the things which were learned by the students", all of which were observed by the students as the things they learned. "The occasion" was classified into three categories, "the situation and condition of the children" into ten categories, "the effect which were made by their childcare taker," into six categories, "the change of the children" into eight categories, and "the things which were learned by the students" into seven categories, and then I analyzed all of them. Based on the analysis, I presented the measures of the student teaching guidance and learning content in the future by focusing on the achievements and problems of the student teaching carried out by this college.

Key words: playing, understanding of children, support from childcare taker, environmental composition, role of childcare taker

¹ Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, *Email: khamada@kochi-gc.ac.jp

² Tachibana Kindergarten

